喜志西遺跡

富田林市遺跡調査会報告１
編集・発行　富田林市遺跡調査会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
発行年月日　平成８年７月31日

調　査　地　大阪府富田林市
　　喜志町３丁目923－5
調査原因　分譲マンション建設
調査主体　富田林市遺跡調査会
調査担当者　田中正利
調査面積　130m²
調査期間　1996年４月10日～５月２日

はじめに

喜志西遺跡は喜志町３丁目、喜志町５丁目、旭ケ丘町にかけて広がる弥生時代から中世にかけての遺跡で、1982年に発見されました。その頃から駅前整備事業や個人住宅の建て替え、道路築造などが活発になり、それらに伴う調査が多く行なわれてきました。これまでに、弥生時代中期（第Ⅲ～Ⅳ様式）の方形周溝墓や甕棺墓が見つかっており、遺跡の北東にある喜志遺跡の墓域ではないかと考えられています。また、弥生時代から飛鳥時代にかけての自然流路、古墳時代の溝や土坑が確認されています。

今回の調査は、建物部分について、事業主である大倉建設株式会社の協力を得て行ないました。

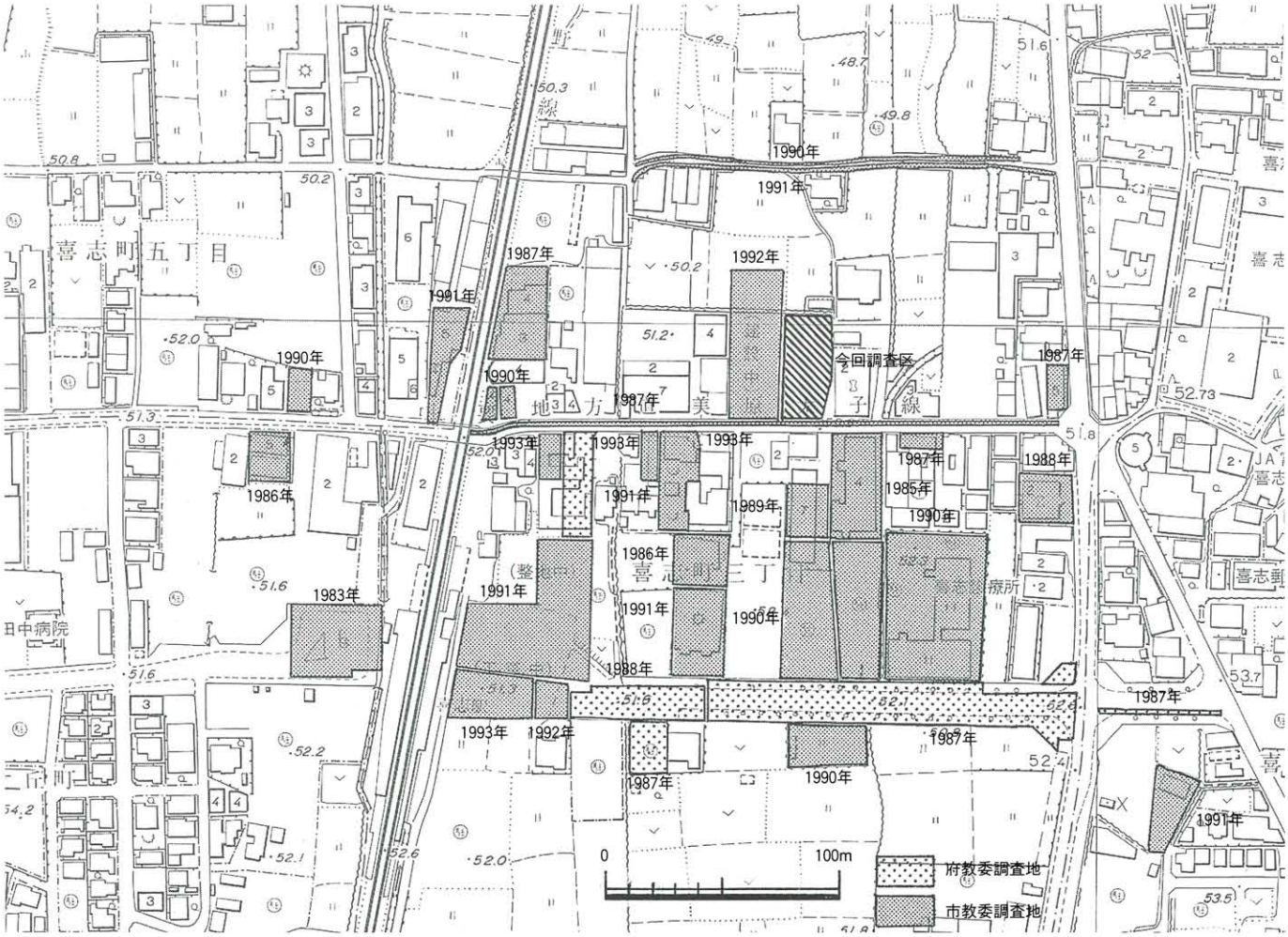

図１　調査区位置図

地形と層位

調査区周辺は、西は羽曳野丘陵、東は喜志遺跡が立地している微高地にはさまれた開析谷にあたります。そのため、調査区周辺には北流する何本かの自然流路があったことが過去の調査でわかっています。

流路が埋まった後、この地域では永らく水田が営まれていたようで、今回の調査でも時期の異なる２面の水田が確認できました。この下が黄灰色シルトの地山で、遺構はこの面で検出されています。

土層は上から順に盛土（50cm）、旧耕土（10cm）、旧床土（５cm）、灰黄褐色土（３cm）、黄灰色弱粘質土（３cm）、地山層となります。

遺構と遺物

今回の調査では、落ち込み１、土坑２、ピット２を検出しました（図２）。

落ち込み　調査区のほぼ全体に広がっており、東側で落ち込みの肩を検出しています。深さは、深いところでは約40cmありますが、ほとんどが15cmと浅く、全体的に底面がでこぼこしています。

これまで発見された流路と同様、南から北に緩やかに傾斜していますが、遺構には暗灰褐色粘質土が堆積していることから、流れがあまり良くなかったことがわかりました。この堆積からはごく少量の須恵器片、土師器片などが出土しています。

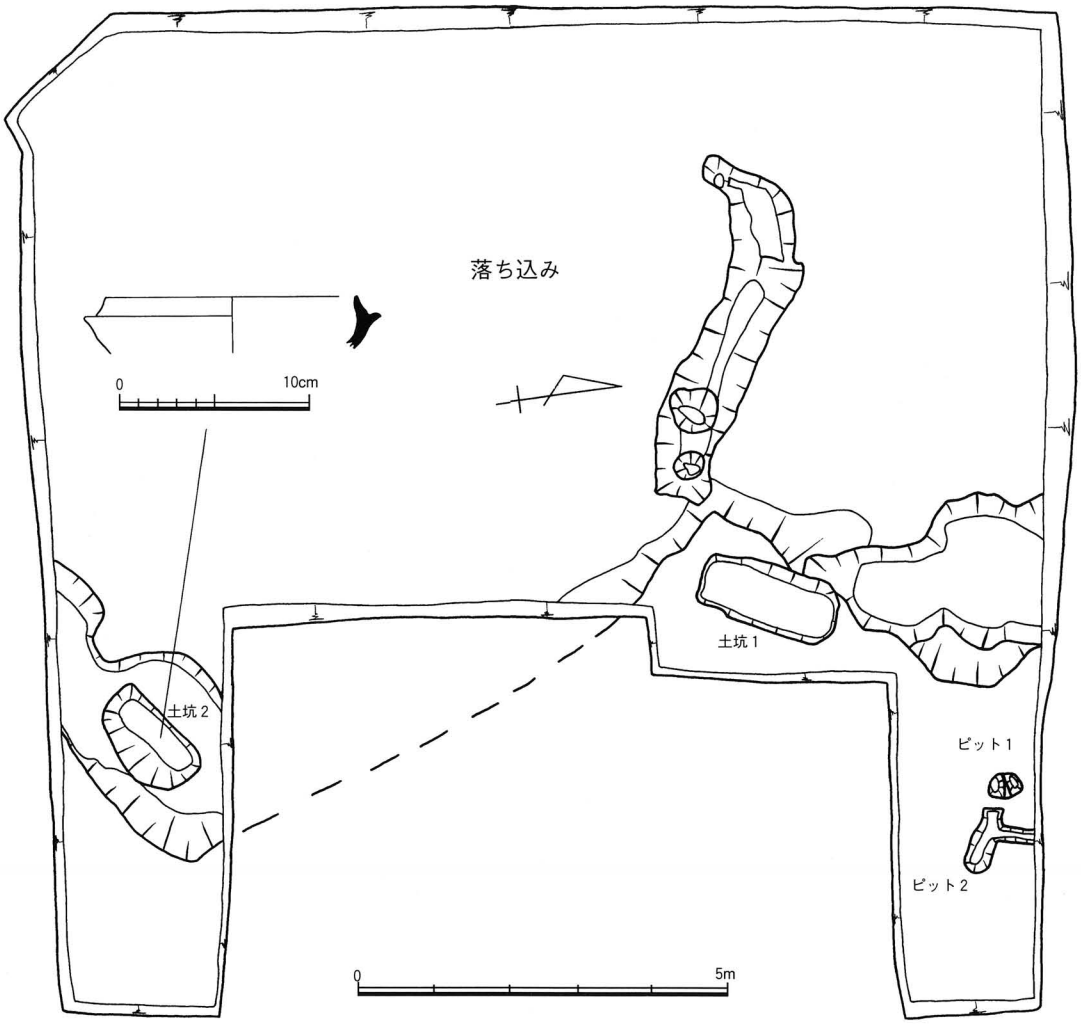

図２　遺構配置図

土坑　調査区の東側で２つ見つかっています。どちらの土坑も落ち込みが埋まったところに掘られています。埋土は両方とも上から暗褐色粘質土、灰褐色粘質土となっていて、２つの土坑がほぼ同時期に埋まったことが分かります。

土坑１（写真１，図３）は、調査区の北で検出されました。大きさは長さ1.86m、幅0.86m、深さ0.15mで、長方形をしています。床面は、やや凹凸があるものの、平らに造られています。埋土から土師器片が少量出土しています。

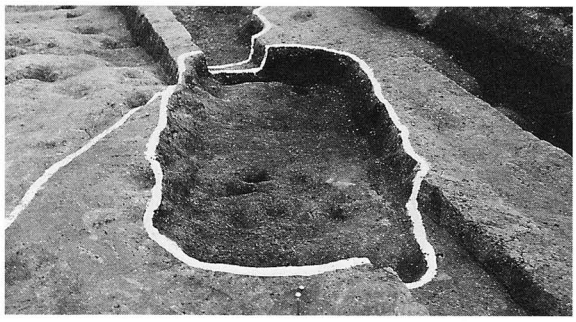

写真１　土坑１（南から）

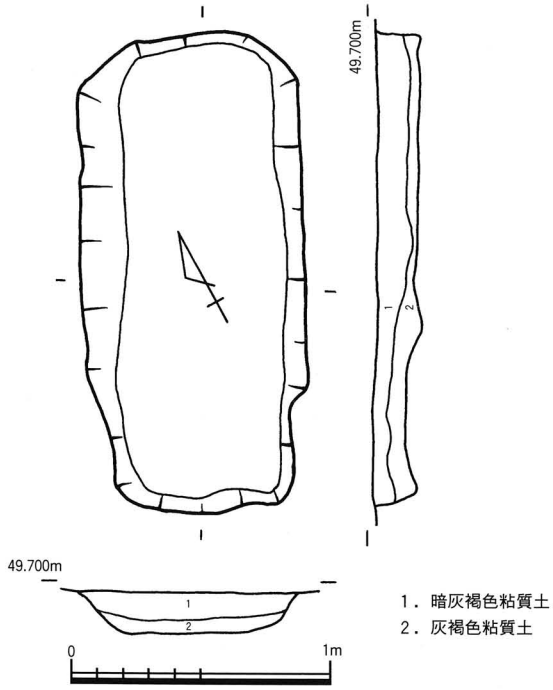

図３　土坑１平面・断面図

土坑２（図４）は調査区の南東にある長さ1.48m、幅0.82m、深さ0.30mの隅丸のほぼ長方形をした土坑です。土坑１に比べると、床面を平らにしておらず、形もいびつで、やや雑な造りといえます。

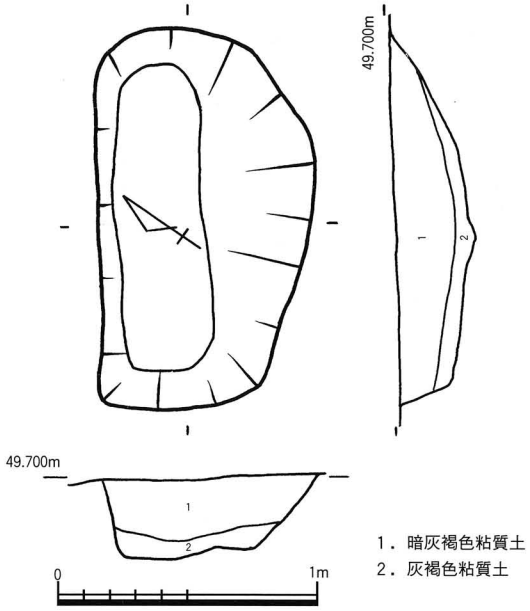

図４　土坑２平面・断面図

埋土から少量の土師器片に混じって、須恵器の坏身片が１点出土しています。

坏身の大きさは口径13.1cm、残存器高2.6cm、受け部径15.6cm、たちあがり高1.0cmで、灰色をした焼成の良いものです。内外面ともに回転ナデ調整が施されています。中村浩編年でⅡ型式２～４段階のものと考えられます。

いずれの土坑も人工的に掘られたものですが、何のために掘られたかについては、土壙墓の可能性があるものの、遺物が少なく、よく分かっていません。

ピット　調査区の北東で検出しています。ピット１は南北0.45m、東西0.30m、深さ0.15mの楕円形、ピット2は南北0.6m、東西0.86m、深さ0.1mの不整形のものです。

いずれも遺物は出土していませんが、埋土が暗褐色粘質土なので、土坑と同じ時期のものと考えられます。

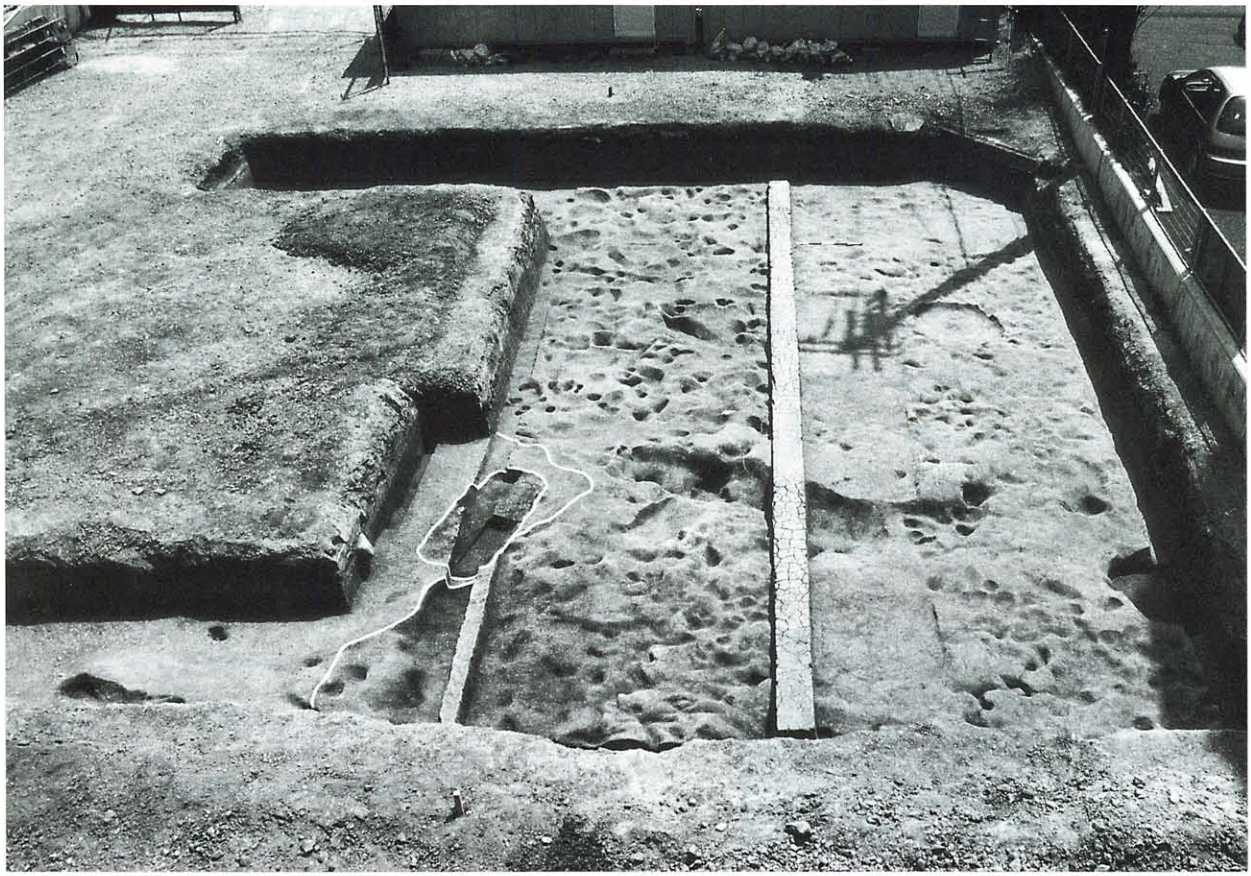

写真２　調査区全景（北から）

まとめ

今回の調査区周辺では、1992年に西側で、1994年には南西で調査が行われています。

1992年の調査では自然流路が１本確認されています。流路内からは弥生土器に混じって、須恵器や土師器が出土しています。特に５世紀末の須恵器が多く、この周辺で人が住んでいたことをうかがわせます。最終的に埋まるのは６世紀ごろと考えられます。

大阪府が行った1994年の調査では、落ち込みの堆積に対応すると考えられる土層の花粉分析が行われており、その結果、この層が古墳時代後期の水田であるとしています。

以上のことから考えると、今回検出された落ち込みについて２つの考え方ができます。

１．自然流路が埋まった後に営まれた水田とする考え方。つまり、暗褐色粘質土が耕土となり、土坑は水田化された後ほとんど間をおかずに掘られたことになります。

２．落ち込みが流路の東岸付近になるという考え方。ただし、1992年調査の流路がわりあい流れが強かったのに対して、今回の部分は水が流れた痕跡が認められず、これを流路とした場合、今回の調査区では常時流れていたのではなく、増水などで一時的に水が流れていたと考えた方がよいかもしれません。

いずれにしても、遺構、遺物ともに少なく、推定の域を出ていません。今後、さらに調査が進むことで明らかになっていくことと思っています。

参考文献

・『喜志西遺跡発掘調査概要』　富田林市教育委員会、1986
・『喜志西遺跡発掘調査概報』　大阪府教育委員会、1988
・『喜志西遺跡発掘調査概報２』　大阪府教育委員会、1990
・『喜志西遺跡発掘調査概要２』　富田林市教育委員会、1993
・『喜西志遺跡発掘調査概報３』　大阪府教育委員会、1994

報告書抄録

ふ り が な	きしにしいせき
書　　名	喜志西遺跡
副 書 名	富田林市遺跡調査会調査報告１
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	田中正利
編 集 機 関	富田林市遺跡調査会
所　在　地	大阪府富田林市常盤町１番１号　☎0721-25-1000
発 行 年 月 日	西暦　１９９６年7月３１日

ふりがな 所収遺跡名		コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
きしにしいせき 喜志西遺跡	おおさかふとんだばやしし 大阪府富田林市 きしちょう 喜志町３丁目 ９２３－５	27214		35° 31′ 13″	135° 37′ 40″	1996.4.10 ～ 5.2	130	共同住宅 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
喜志西遺跡	その他	古墳時代	落ち込み 土坑 ・ピット	土師器・須恵器	